

古典文学における「物語」と「読者」

——書写・印刷史を視座として——

森田雅也

〈キーワード〉物語・読者・印刷史・仮名草子・西鶴

一、はじめに

主意書「物語が不可能になった時代の中で」という命題をいただいて、少々の《愕き》と、やがて唱えられるであろうという予感の中にも似た《静穏さ》で迎える自分があった。

明治という急激な変法を受け入れた日本は「世界的」という言葉を金科玉条の語としてしまった。西欧が十九世紀、それも中頃になってようやく「小説（本稿の主意からは「物語」の意）」という文学形式が主流になったのに対して、日本には記紀の時代から「物語」はあった。否、世界的に抒情、叙事文学が主流であった時代も「物語」は和歌・連歌・俳諧と拮抗し、盛況を呈してきた。しかし、その流れを日本文学史は明治維新を境として《古典文学》として隔絶してしまっただけである。

欧米が写実小説、社会小説等によって描き出す克明な人間心理の描写はやがて、日本の近代小説に流れ込み、自然主義、耽美主義、

であろう。

それでは我々「物語」研究の向かうべき寄る辺はどこにあるのか。行き着くところは「物語」とは誰のために書かれたのか。言旧りながら想定された読者は誰なのか。今こそ原点回帰し、文学の営みの中で再検証すべきではなからうか。もともと、この提言は近世文学を研究する一人としての狭量なものかも知れないが、以下、挑発的な発議としたい。

※ここであげる古典の「物語」には『日記』のような記録性、『日記』のような自照性を謳うものも含んでいる。また、今回のシンポジウムでは古代文学、近現代文学、そして論者は近世文学の研究領域の視座から発題を行ったことを付したい。

二、物語と書写時代

古代の文学において物語が書写されて読者を獲得していった嚆矢を言明することは極めて困難であろう。それは物語というものの定義が得られないためである。古代の物語を文字で書かれた固有のものとして定義しなければ、神話、伝説、民話、芸能等あらゆるパフォーマンスまで括がることになるであろう。論者もこのことに苦しみ、ラン・バルトやウラジミール・プロップ、レヴィーストローヌなどを援用して定義に苦悩することがあったが、とりあえず文字に書かれたものとすれば清濁が得られる。

浜田啓介氏は『近世文学・伝達と様式に関する私見』の中で、言語の機能は伝達にある。この機能をより強大にさせようとし

幻想文学等多くの傑作が生み出されることになる。そして、モダニズム、哲学思想、科学思想、私小説、無意識、意識の流れ、不条理、構造主義、ポスト構造主義、記号論、フェミニズム等々、二十世紀の「物語」の多角的な展開には筆を尽くせないが、戦前戦後を通し、日本近代文学は世界文学史の中に列せられていく。我々も世界文学史の中の日本文学史を求めたのである。

二十一世紀を迎えた今、グローバル化が大きく叫ばれ、言わずもがなグローバル英語による国際化を旗幟に掲げない高等教育機関はない。日本文学においても、日本語表現を越えた世界的コミュニケーションの新时代がもうそこにあるのかもしれない。

その反動ではないが近年、ポストコロニアリズムを唱える中で、旧宗主国によって奪われていた母国語による文学が見直されている。植民地として失われていた独自文化の復権と言つてよい。日本文学でもアイヌ文学、琉球文学をこの視座から研究するグループも注目されてきている。将来的にはグローバル化に抗する存在となり得る

て、技術が用いられる。(中略)大略、我が国の古代、中世はこの筆墨・手写の時代である。写本によって文化は時間的に継受されたのである。学芸が証本と共に家系に伝承されて、秘伝的な構造をなしていた中世文化の特徴も、多くの伝達機能の特性に負っている。この中世的伝達機構を衝き崩したのは、木版術の商業的普及であった。

木版術そのものは、古代に存在し、中世や行われ、近世には伝達機能の勇者となる。木版術は、伝達の機能の強さ、特にその空間性の面に、また一つの高い次元を獲得したのである。すなわち、伝達の空間性が、線から面に進んだのである。

あえていわば、出版という技術によつて、伝達は、初めて真の空間性を獲得したと言つてもいいであろう。(※傍点は森田以下同じ。)

と述べられている。些か長い引用になったが、本論考の基底を為している基礎理論ともいうべき見解である。ただ、浜田氏は右のタイトルに基づく論を詳細に縷々展開され、大著にまとめあげられているが、論者は未だ伝達機能の面から日本の書物そのものの歴史展開を論じる見識を有していない。そのため、以下、日本文学の中の物語の展開について、読者との関係から、拙陋な文学論を述べたい。日本文学の場合、その単なる伝達手段としてまず「漢字」が用いられた。もちろん、その国産化の産物として万葉仮名も位置づけられてよいであろう。これが日本文学の嚆矢であるはずである。だからといって、ここでその本質性を究明し、日本文学史の構築のために、

なまじ「物語」の構造分析に拘泥し、記紀や『唐大和上東征伝』などの昔に物語性の別を求めて分析を行えば、離合集散の呈ともなりかねないので避けたい。

そうなるも兎にも角にも、古代初期に書かれた日本の物語の嚆矢は「漢字」を理解出来る人を読者として想定し、書写されていったものと短簡に言い切ることが可能である。なるほど大陸文化からの漢字輸入の過程はさて置き、古代社会における物語は、その「漢字文化」を共有できる層へ向けて発信されたことは容易に想像できよう。その面からは日本に限らず、アジアにおける漢字文化圏への発信とまで位置づけてよいであろう。

ただ、『土佐日記』が記すように真名が男性、仮名が女性として読者を絞ることは危険であろう。それは、書写する人あるいは書写を命じられた人にとって、想定される読書人は等しく文字を愛する人であり、そこに男女の別はなかつたからである。

ところで、その初期において物語を創作し読者を拡大するという作業は障壁が多かつたであろう。「書写」という行為を思い浮かべただけでも、楷書で何巻もの「物語」を書き、それを書写し、広く伝播させるといふ努力は途轍もない作業であつたであろう。高価な和紙を用いるなど経費の面からも公的文書でもない道楽にしては贅沢が過ぎる行為である。

その反例とも言うべきが『百万塔陀羅尼』である。この世界最古の印刷物は「無垢淨光大陀羅尼經」に説く造塔・写經の広汎な功德を期待して行われた國家事業とされている。が、実際は大きなハン

かという古注釈の研究が綿々と行われたことは両極であろう。

いずれにせよ、中古の王朝文学は「宮廷文化」を共有出来る読者を獲得する。しかし、すべての物語がそうではなく、同時並行的に仏教思想に基づく「仏教文化」を共有出来る読者たちや戦乱の世を迎え、「武士文化」を共有できる読者たちが物語の想定される読者として迎えられていく。

これらが混沌として鼎立して中世の物語を成立させていく。宮廷文学の名残を保つもの、宗教的意味合いから説話や高僧伝、諷いの歴史から英雄伝、軍記である。

ここで、それらの個別例について成立論や生成論に言及できる立場を論者は有さないが、これらは中古の読者層とは違った、中世の読者層を形成したのである。

ただ、中古・中世の優れた物語の数々も不特定多数の読者の獲得という点では、近世の版本を待たねばならない。逆に作者と読者との関係に書写というツールしかない時代には、物語の成立と作者が想定する読者についての在り方は印刷時代とは根本的に状相を異にしている。つまり、例えば写本時代の『源氏物語』と版本時代の『源氏物語』では別物と言わないまでも、読まれ方や読者作用において隔絶したものであるはずである。事実、江戸時代の人々は『源氏物語』を「絵入源氏物語」「源氏物語湖月抄」「首書源氏物語」などで読んでいたわけであるから物語の受容の在り方が写本時代の読者とは別様と言つて過言ではない。同じ作品ながら、多様な読みを提供する——これこそが「物語」を読書する快楽ではあるまいか。

口を上から紙に押し込んだもので、そこには墨をまんべんなく分布させるといふ操作が加えられていない。つまりこれは「印」であつても「印刷」ではないのである。このような印出方法でも用いなければ、印刷で漢字の文献を大量に流布させるという行為は成り立たなかつたのである。無論、世界には「大蔵經」のような例はあるが、この時期の日本には無理な技術であつた。とてもではないが、「物語」のような遊び物の印刷を開発するスポンサーもなかつたとしてよからう。

さすれば、漢字を用いている以上、物語は大量に書写することができない。物語が少しでも多くの読者を獲得するためにはどうすればよいか。それには書写行為のスピードをあげるしかない。その試行錯誤の結果が漢字を簡易化した仮名の登場であり、「連綿体」という書写方法ではなかつたか。そう仮定すれば、中古の仮名文学の登場は理解しやすい。決して国風文化というイデオロギー的な側面ばかりでなく、作業の面から仮名による文学は生み出されたのである。物語が読者を得たいという欲求とともにである。

もちろん、「連綿体」が生み出されたのは和歌の視角芸術の面からであつたらうし、書かれる場での余白の美などと相まつた総合芸術として語るべきであろうが、漢字仮名交じりの流麗な文字が単に物語の内容だけでなく、物語の紙価を高めるような効果があつたとも考えられよう。『更級日記』で『源氏物語』を獲得する欲びは大いにこの作用の中にあつたのではあるまいか。

一方で物語をいかに当時の作者の立場にあつて正確に理解すべき

そのようなテキスト論の根底には、写本から版本を必要とするようになる社会の変容が背景として存在しているのである。

付けたたりな扱ひとなり本意ないが、中古からの物語の伝播形態の主流と言つてもよいのが「絵巻物」である。「作り物語」が「やまと絵」の技術と共に宮廷文化に受け入れられ、次々と流布したことは事実であるし、中世に入つても御伽草子や寺社縁起などに拡がりを見せ、絵解きなどの文学形態にまで展開したことは日本文学史上に歴然と刻むべきである。だが、絵巻物の物語は読者の記憶には残つても、反復して読書する行為に加えられるであろうか。本稿の主旨からはこれを論じないことを海容いただきたい。

同様に鎌倉末期から室町末期にかけて、京都・鎌倉の両五山を中心に出版された、いわゆる「五山版」については、仏書以外の漢籍や和漢聯句などの詩文集なども出版し、かな交じり文の圖書まで刊行された実状から、出版事業としては看過すべきではないが、「物語」というテーマからは論じない。それは「春日版」「高野版」も同じ理由である。

さらに紀行文と随筆・日記などの自照性の高い作品群がある。先に『土佐日記』をあげたものの論者はこれをノンフィクションの紀行文と見ていない。一方で『和泉式部日記』『更級日記』『十六夜日記』は日記のような記録文学と見ていない。しかし、無数の中世紀行文のように日本文学史のどの時代にも通底する旅の記といふジャンルは判別が難しい。後の時代の『奥の細道』と『曾良随行日記』のように虚構性が明解な例が少ないからである。随筆・日記は

想性も含まれているので、「物語」とは言えないものの「枕草子」「方丈記」「徒然草」などのように一部に物語性を帯びたものがある。「とはずがたり」などはジャンル不特定というべきで、日本古典文学史にはジャンルに固執せず、個別論として検証すべき作品が多いことを断っておきたい。

三、物語と出版技術の向上—活字印刷の登場—

さて、「物語」のような絵空事を読む快楽が得られる社会背景とはいかなる時代であろうか。荒唐無稽な命題のようであるが、やはり戦乱の世では難しかったことは想像に難くない。贅沢な写本である物語を愉しめるのは、莫大な経済力を有した一部特権階級であつたらう。だが、彼らの生活も臣下であつた武士たちに脅かされ徐々に平穏な生活を取り上げられていく。それに代わって台頭した武家政権の日々も戦乱に明け暮れ、連歌や和歌、能や幸若舞などを嗜んだことは知られているが、軍記物以外にその名を留める「物語」の傑作は生み出されなかつた。それでもなお、群雄割拠しながらも戦国時代が終息の色を見せ始めると、教養としての読書文化は息を吹き返してきた。

多くの人と読書の愉しみを分かち合いたい。読書人を獲得するにはどうすればよいか。それはテキストの共有である。この思いが印刷本を必要とするのである。

ちょうど十六世紀後半、日本は世界の二つの印刷先進文化を知ることとなる。キリシタン版と朝鮮版である。ともに活字版である。

活版印刷の導入は、寛永期(一六二四—一六四四年)以降の日本の商業出版活動を活発化させた。朱子学中心の漢籍は武士階級に求められ、寺院その他では仏典や国書が、また次第に経済力をつけた町民階級向けには絵入り本、俳諧書、往来物などが出版された。いわゆる「物の本」である兵法・文芸・道徳・思想などの典籍類に対して、娯楽的な「草子」が伸びていった。しかし、活字印刷は安価な木材を用いているとしても、設備投資に巨額の資本を必要とした。字木切り(駒作り)、字彫り(活字彫り)、筆耕(版下清書)、植え手(版起)、摺り手(摺り・刷り)、校正(内校)、装丁(製本)まで網羅しなくてはならない。その上で機材一式を揃え、各種活字セットを合わせて百万本くらいは用意しておく必要があるのだから、一冊の単価はかなり高くなる。「物の本」や仏典・医書のような実用書ではない、娯楽的な「草子」すなわち「物語」を高価でも買つてまで読もうとする読者は、かなり裕福な人々の層となる。そうなると、作者が想定する読者も限られてしまふことになる。中でも「嵯峨本」はその傾向が著しい。

初期の嵯峨本は本阿弥光悦(一五五八—一六三七)が版下に能筆を揮い、豪商角倉素庵(了以の弟、一五七一—一六三二)が開板に当たつた印刷本であり、角倉の屋敷のあつた地名からそう呼ばれた。並紙に印刷した大和綴のものもあるが、多くは本文や表紙の料紙に色変わりのものを使い、胡粉を引いてそこに花鳥草木の三十余種の雲母模様を摺りこんでいる。そこに依屋宗達らが挿絵を描き、開板は素庵のほか光悦自身が当たつたも

キリシタン版は存外多く、断簡を含めて内外に三十一種七十三本が現存する。本は各五百部前後印刷されたとすれば、およそ四万部に及ぶ。一五九〇年代のキリシタン最盛期の信者数は全国で三十数万人に達したといわれているから、その理解者も含めて多くの需要があつたと見られるもの、キリシタン禁教政策とともに終息していき

朝鮮活字本の印刷技術は慶長勅版、豊臣秀頼版、徳川家康の駿府版などに影響を与えるが、文化普及のための印刷事業であり、読者拡大を求めたとは言えない。

しかし、中世以来の戦乱の時代が治まると、凡なる表現であるが天下泰平の世を迎える。士農工商という身分制度を定め、街道を整備するなどインフラを整備し、徐々に武断政治から文治政治に移行した安定政権となる。金銀銅の鉱物資源にも恵まれ、鎖国政策を布いたことで外国からの侵略の脅威もおさまつた。廻米制度もあつて、天下の台所商都大坂は繁盛し、王都京都とともに上方文化を充実させる経済的基盤が整つた。江戸は天下普請の好景気によって単なる行政の中心から経済の中心地へと世界的な大都市に成長しつつあつた。近世前期は近代を迎えるまで、日本史上、かつてない繁栄を迎えていく。ここに人々は文化を嗜む余裕ができ、読書によって自らの教養を高めたいという願望が高まってくる。さすれば、読書をするには写本では追いつかない。需要に合わせた教養本の供給には、印刷本での製作しかない。そこで、用いられたのが右の活字印刷の技術を国産化した古活字本である。

のなどもあつて、美術的意匠を凝らした優美なものが多い。嵯峨本の「美術的意匠」の面が評価され、所有することが目的になつてしまふと先述の絵巻のように保管され、特定の読者層だけのものとなり、多くの読者から遠ざけられてしまつた。未だ写本時代とあまり変わらない「物語」の読者層となり、「物語」の作者にも世間の耳目を集め、名声を後世にとどめる者は少なかつたのである。

四、物語の読者の獲得—整版本と貸本屋の登場—

中村幸彦氏は半世紀も前に以下のような提言をされている。

近世の初期には、印刷が漸く普及して、文学書も多く出版を見た。殊に、従来の如く写本の伝播では、種々の困難を伴つた大部の散文文学や、新しく著述され又は編纂された小説、文学史上では、仮名草子と呼ぶ作品も、この印刷にのつた。このことの重大な意義は、既にどんな小さな文学史も特書大筆する所である。しかしてその意義の説明は、どんな大きな文学史でも、専ら、この印刷によつて、広く多くの享受者即ち読者を得たことのみ止まつている。それはそれとして、大きな意義であることは勿論ながら、作品の供給側即ち作家や、それを伝播する書肆の意識にも、印刷という新事態が、新しい影響を与えたに相違あるまい。よつて作品そのものも、印刷に左右された変化があつたのではあるまいか。

右の「仮名草子」とは江戸時代初期にあらわれた仮名和書とか草紙と呼ばれた小説類を含む仮名書き本の総称である。徳川幕府の政

策もあって、識字率が急激に上がり、漢籍を読むのは難しくても仮名書きであれば読みたいという知識人を読者層として取り込んだが、彼らは貨幣経済の発展と幕府の文教政策ともに急激に現れた想定できない読書人のため、高度な文芸書を提供するまでには至らず、ほとんどが通俗的であった。名所案内記、見聞記、遊女評判記などの実用的なもの、儒教や仏教による民間教化のための啓蒙的・教訓的なもの、室町期の御伽草子の小説もの、古典文学のパロディものなど分類することが困難なほど多岐にわたっていたが、前章で述べたように急激に発展した木版印刷術によって浮世草子登場までの八十年間、京都を中心に出版されて流行した。

仮名草子は、「作者」と「物語」という意味では「広く多くの享受者即ち読者を得た」ことに貢献した。内容的には前時代的要素を抜けきれず、印刷方法も古活字本と整版本が混在した過渡期の文学史的ジャンルであるが、殊、「物語」として名をとどめたものを見れば、「醒睡笑」などの笑話本、「天枕」「尤之草紙」などのパロディ物、「信長記」「太閤記」などの武功物、「恨之介」「薄雪物語」などの恋愛物、「伊曾保物語」「仮名列女伝」などの翻訳物、他にも『竹斎』『可笑記』『二人比丘尼』などがある。作家も名をとどめるようになった。論者は多くの中でも浅井了意と山岡元隣は近世小説の基盤を形成した作家と評価したい。特に了意の『浮世物語』、中国怪談の翻案だけに終わらない『御伽婢子』は記しておきたい。ただ、概して仮名草子は古来からの文京の地京都から知識人による一般民衆への啓蒙教化を目的として発信されたという色彩は拭えない。

ある。そうすると、この一点をとつても、作品と作家と書肆と読者の関係は存在しており、中村氏の提言は仮名草子とされるものの、浮世草子において正鵠を得ていると確認できるのである。

市古夏生氏も「近世になってから商業出版が開始されることは周知のことであるが、それにより新たな文学環境が生じることになる。作者は出版を前提にして執筆するようになるし、それは取りも直さず版元の意向を考慮せざるを得ないようなことも起こってくる。ここでいう版元の意向とは、書物の売行きに敏感な本屋がどのような傾向のものを求めているのか察知したり、或いは本屋が要求してくる条件に合致するように書くということである。」として、西鶴が俳諧では大坂のおはりや安兵衛、深江屋太郎兵衛を版元としながら、小説では最初の『好色一代男』は大坂の荒戸屋孫兵衛可心、二作目『諸國大鑑』は大坂の池田屋三郎右衛門、その次の『枕久一世の物語』は大坂の森田庄太郎というように、大坂の版元の中でも昵懇の深江屋からの出版をなかなか行おうとしない例をあげて、人気が作家と版元の関係を論じておられる。ようやく五年を経て『男色大鑑』を深江屋から出版するが、それは俳書専門の版元に対しての西鶴なりの遠慮ではなかったかとされる。論者は西鶴が俳諧師西鶴と浮世草子作家西鶴とのけじめとして版元を違えたのではないかと推測するが根拠はない。いずれにせよ、右の『西鶴諸國ばなし』同様に、ここにも作家と版元との密接な関係、さらにその向こうにある読者への配慮が垣間見られるのではなからうか。

西鶴亡き後も浮世草子というジャンルは七十年近く好評を博すが、

この仮名草子の時代は、西鶴の『好色一代男』の出版をもって終息するとされる。

井原西鶴（一六四二—一六九三）は大坂談林俳諧の旗手として君臨するが、師事する西山宗因亡き後は浮世草子作家として一世を風靡する。その嚆矢「好色一代男」（一六八二）は、西鶴としては仮名草子として出版したが、その作品内容は従来の仮名草子とは画期的に違い、いつの間にか現代小説家の意として「浮世草子」作家と呼ばれるようになる。大坂から出版したにもかかわらず、江戸でも出版され、この後、遺作も含め、二十作品に近い浮世草子を刊行しベストセラー作家となるが、印刷史の中でも短編集である浮世草子に各章挿絵を設けたり、京都という出版書肆ではなく、新興の大坂の書肆を起点とし、二都だけでなく、西鶴の活動時期にあつて、三都（江戸・京都・大坂）の各々の書肆から同時発売されるといふ三都版制度もできあがるなど注目できること多々である。

ところで、先述の中村氏は、印刷は供給側である作家や書肆の意識にも関係するようになったのではないかと提言されている。『西鶴諸國ばなし』（一六八五）の場合、内題には「天下馬」「近年諸國咄」とあるにもかかわらず、作品外題は『西鶴諸國ばなし』として売り捌かれる。内題は西鶴の意志、外題はすでに流行作家であった『西鶴』の名を配りたい出版書肆の思惑とすれば、そこには作家と書肆の間で読者への提供方法をめぐって肝を割った話し合いがあったということになる。いわば「売れる本」つまりは読者を獲得できる作品になるように作家と書肆が一体となって協議した痕跡なので

後継者の一人として知られている江島其積が版元八文字屋八左衛門と時には協力し、時には相克するものも右の作家と出版書肆の密なる関係が生み出したものと言えよう。あくまで広範な層の読者を取り込もうとして、芸術性や教養性より娯楽性に徹し、商業主義に邁進した八文字屋本と総称されるこの出版事業は、現代までの出版史に影響を及ぼし、売上至上主義的な本の供給に繋がっているのではないかと考えるのは論者だけであろうか。

さて、浮世草子はそのほとんどが整版本である。先に古活字本制作において、多額の資本が必要であることを示したが、逆に整版本は版下と彫り師と摺師がいればできることを考えれば、人件費も少なく、工房も狭くて済み、とても安価な図書となる。この整版本は三都の本屋仲間の庇護の元、本の利便さ、浮世絵に認めるような挿絵の向上などさらに技術を高め、近世後期の読本、洒落本、黄表紙など価格を安く抑える「物語本」として読者の購買欲を掻き立てていく。近世末期の人情本などは主たる収入がない婦女子までを読者として獲得するが、これは大正・昭和期の円本、文庫本のような廉価本と意を同じくしているはずである。「売れる本」すなわち、多くの読者の獲得につながったのである。

さらに一つ、大量の読者獲得に大きく貢献したのが当時出現した貸本屋制度であった。

長友千代治氏は、浮世草子が人気を集めた理由に、その前夜に読者の大衆化が進んだことをあげ、写本に比べ廉価な整版本印刷の普及によって庶民でも購入しやすくなったことに加えて、この時期に

貸本屋が誕生し、活躍した実態を分析され、以下のようにまとめられている。

貸本屋の誕生を、民間で出版が行われるようになり、商業本屋が栄え、娯楽的な本が豊富な挿画入りで出版され、一般大衆が読者を楽しみにするようになる頃からと、漠然と推測することはできる。そしてその時期を整版印刷が普及しだし、庶民相手の仮名書中心の小説、実用書、娯楽読物が出版されだす寛永年間、(一六二四―四三)、頃と目安をたてることもできる。言うまでもなく、この前後から商業本屋は増加し、出版物も多くなることは、出版史や文学史に照らして明らかである。

右の言のためには長友氏の入念な膨大な研究が基盤となっておりが、例えば、現在のレンタル料金がオリジナルの何分の一かの安価な価格であるのと同様なシステムが江戸時代初期からあった事実を思えば、この貸本制度が江戸時代を通じ、いかに幅広い読者獲得に果たしたか、その功績ははかりしれない。

以上の作家と書肆と読者の関係の考察をさらに江戸時代後期に向けて考察を続けるべきであるが、山東京伝の手鎖五十日の刑と葛屋重三郎の身代半減の刑のように、幕府の出版取り締まりなど多くの個別の問題が生じ、幕末にいたっては、さらに複雑な状況が加わってくる。そのため、このたびは近世初期に留めた論とご理解いただきたい。

五、まとめ

再三、断り書きをしてきたように本論考はシンポジウム「物語が不可能になった時代の中で」というテーマを受けて、古典文学における「物語」と「読者」の関係を書写・印刷史を視座とした発題が元になっている。そのため、印刷史の徴表を捉えた過分に挑発的な主観的な論となっている。しかし、古典文学における「物語」を印刷物と認識して読者層との関係で読み解くというテーゼは成立したと考えている。

日本文学史そのものは近代を迎え、木版印刷から活版印刷による大量印刷の時代を迎えていく。「物語」は不特定多数の読者を想定することとなるのである。一方で新聞小説という、「期待」を寄せる読者達に「物語」のストーリーを期待の地平に展開させていくという方法も定着していく。

しかし、それらの活版印刷がワープロの時代を迎え、「物語」がネット配信されていくという形態を迎えるようになった。「読書」そのものの行為が大きく変容してきたのである。そのネット社会は世界に発信されることで文化の高度な共有を許すこととなる。例えば、「キリン」や「象」を比喩に使用して共有できなかった百年前ではない。想定される読者から想定を超えた読者に向かって「物語」を提供する時代になったのである。近未来、多種多様な言語表現すらAIなどによって簡単に共有されるようになるのではないか。古典文学についても、すでに変体仮名すらAIによって自動解読でき

る技術が複数の機関によって開発・実践されつつあるのは興味深い。極端に言えば、AIも読者になり得るのである。この事実を古典の「読者」と「物語」論とは別儀として馬耳東風で過ごされなくなった時代の中に生きていることは、非常にスリリングであり、無限に拡がる読みの多様性に挑戦する可能性に血湧く快樂ではなからうか、として結びたい。

注

- (1) 「2 出版と文字の歴史」浜田啓介著『近世文学・伝達と様式に関する私見』(京都大学出版会)二〇一〇年刊。十三頁。
- (2) 「第9章 書物の宝の森 第2節 東アジアと日本 百万塔陀羅尼は何だったのか 奈良朝仏教三大偉業のひとつ」凸版印刷博物館編纂委員会(委員長 樺山紘一)『印刷博物館』(凸版印刷)二〇〇一年刊所収。六一―二頁。
- (3) 「第2章 紙の登場と印刷の時代」阿辻哲次著『知的生産の文化史 ワープロがもたらす世界』(丸善書店)一九九一年刊。一一―四頁。
- (4) 「第6章 印刷文化の伝統 第2節 日本の印刷文化 伝統の形成と発展 キリシタン版種類」『印刷博物館』所収。四二―頁。
- (5) 「第6章 印刷文化の伝統 第2節 日本の印刷文化 伝統の形成と発展 木活字印行者、角倉素庵」『印刷博物館』所収。四二―三頁。
- (6) 注記(5)に同じ。四二―四頁。
- (7) 注記(5)に同じ。四二―四頁。
- (8) 「印刷の時点―仮名草子小考―」中村幸彦著述集 第五卷 近世小説様式史考(中央公論社)一九八二年刊。五十二頁。初出は『文学研究』(九州大学文学部)第六十五輯 一九六八年三月刊。
- (9) 「第三章 二都板・三都板の発生とその意味―西鶴本に即して―」市古夏生『近世初期文学と出版文化』(若草書房)一九九八年刊。三〇―五頁。

(10) 「I 近世貸本屋の誕生と機能 二 貸本屋の出現」長友千代治『近世貸本屋の研究』(東京堂出版)一九八二年刊。二〇頁。

(関西学院大学教授)